

# 「包括型地域生活支援プログラム（ACT）の普及啓発・立ち上げ支援事業」報告書

## 目次

### はじめに

#### . 事業の目的

#### . 事業の概要

1. 包括型地域生活支援プログラム（ACT）の全国ネットワークづくりを行う
  - 1) ACTコアグループミーティングの開催
  - 2) 全国集会の開催
  
2. 全国9ヵ所におけるACT普及啓発のための講演会・ワークショップの開催
  - ・ ACT 北海道研修会
  - ・ ACT に学ぶ（札幌市）
  - ・ ACT を学ぶ（大阪市）
  - ・ ACT が地域精神医療を変えられるか（富山市）
  - ・ 精神障害者の地域生活を支えるACT（島根県）
  - ・ 東海地区ACT研修会（名古屋市）
  - ・ リカバリーについて学ぼう！～リカバリーを目指すACT/IPSとは～（新潟市）
  - ・ 北九州ACT普及啓発セミナー（北九州市）
  - ・ 精神障害者の地域生活と社会参加を実現する支援の仕方（品川区）
  
3. ACT立ち上げ支援

#### . 事業の成果

#### . 今後の展望

## 資料

資料1：ACT全国研修 資料（抜粋）

資料2：ACT普及啓発のための講演会・ワークショップ 資料（抜粋）

## はじめに

近年の精神保健福祉施策の変革は目覚しく、入院治療・施設処遇中心から地域生活中心の方向へと推進している。しかしながら、臨床現場における実践はそれに伴っているとはいいがたい現状がまだ続いていることも否めない。つまり、変革への萌芽はあるものの、本人の主体性や自己決定権を尊重し、退院後の環境を念頭に置いた入院治療や、効果的な地域生活支援が充分に実践されているとは言えない。

こうした状況を変革していくためには、ACT の持つ理念や支援技術が、既存の精神保健福祉のサービスの底上げに貢献する側面は大きいと思われる。

本事業の目的は、「重度の精神障害を持つものでも安定した地域生活を可能にするという科学的根拠のある包括型地域生活支援プログラム（ACT）を全国に普及啓発し、今後の制度設計に寄与できる実行可能なモデルプログラムを提示すること。」である。

ACT とは、従来であれば入院が必要とされていたような重い精神障害を持つ人々が、地域で自分らしく生活できるよう、多職種チームが訪問活動を中心として支援を提供する最も集中的・包括的なプログラムである。

このプログラムは、本人や本人を取り巻く環境の持つストレングス（長所・強み）を伸ばし、働くこと、住むことなど「あたりまえの生活」を送れるようになること、そして、人としての尊厳を回復し、自らも楽しみ、社会にも貢献できる暮らしが送れるようになることを目標としている。

プログラムの特徴としては、多職種からなるチームが、アウトリーチ（訪問）を中心としたサービスを24時間365日実施するなどの高密度の精神保健福祉サービスにある。スタッフ1人当たりの担当する利用者を10人以下とし、再発防止、危機介入などの医療サービスに加え、住居支援、資源調整・開発、就労支援などのリハビリテーションや福祉サービスまで、集中的・包括的（医療・リハビリ・福祉）に地域生活の支援を行っている。

ACT は「入院期間の短縮」「地域生活の安定」「利用者の満足度」について明らかな効果が多くの国で報告されており、我が国でも平成15年度より千葉県市川市国府台地区で日本版 ACT（ACT-J）の開始を先駆けとして、京都や岡山、愛媛、仙台など全国十数か所でそれぞれの地域・システムの中で ACT チームが実施されている。

しかしながら、ACT が実践されている地域は数少なく、ACT を必要としている利用者やご家族のニーズに答えられていないのが実情である。本事業の必要性は、この現状が物語っている。

当法人である、地域精神保健福祉機構・COMHBO の ACT-IPS センターは、平成20年4月に設立された。ACT-IPS センターのミッションは、「私たちは、コンシューマーのリカバリーを実現する伴奏者（伴奏者）になることを活動の使命とする。その一環として、コンシューマーの地域生活や希望の実現を目指すプログラムである、ACT や IPS などの普及啓発、教育・研修、モニタリングの活動を実践する。」である。そしてそのゴールとして、長期目標は「リカバリーの文化が精神保健の領域で当たり前ものとなる。」であり、短期目標は、「精神保健の専門家、家族、当事者が ACT/IPS に関して知る。ACT/IPS が地域の中で実践され、成果をあげる。施策の中に ACT/IPS が取り入れられる」である。

本事業は、まさに ACT-IPS センターの目標実現への第一歩を踏み出す原動力となった。

最後に、本事業にご協力していただいた関係者の皆様、ご多忙の中、我が国における ACT 普及啓発にご協力頂き、厚く御礼申し上げます。また、リカバリーの文化が我が国の精神保健医療福祉の領域で当たり前ものとなることを祈念いたします。

平成21年6月

特定非営利活動法人 地域精神保健福祉機構・COMHBO ACT-IPS センター

## ．事業の目的

重度の精神障害を持つものでも安定した地域生活を可能にするという科学的根拠のある包括型地域生活支援プログラム（ACT）を全国に普及啓発し、今後の制度設計に寄与できる実行可能なモデルプログラムを提示すること。

## ．事業の概要

### 1．包括型地域生活支援プログラム（ACT）の全国ネットワークづくりを行う

1）全国のACTを実践している団体の代表者によるネットワーク会議（名称：ACTコアグループミーティング）を、年度内に5回実施し、今後のACTの普及やACTサービスの質の向上に関して、議論を重ねた。

#### 【ACTコアグループミーティング実施日】

- ・ 平成20年5月30日（金）18：30～21：00
- ・ 平成20年9月5日（金）18：30～21：00
- ・ 平成20年10月17日（金）18：30～21：00
- ・ 平成20年11月30日（日）13：15～14：30
- ・ 平成21年2月20日（金）18：30～21：00

#### 【ACTコアグループミーティング構成委員（順不同）】

氏名	所属
桶田 昌平	北海道立緑ヶ丘病院付属 音更リハビリテーションセンター
沢村 俊彦	北海道立緑ヶ丘病院付属 音更リハビリテーションセンター
下山 友章	北海道立緑ヶ丘病院付属 音更リハビリテーションセンター
西尾 雅明	東北福祉大学 せんだんホスピタル S-ACT
梁田 英磨	東北福祉大学 せんだんホスピタル S-ACT
高木 俊介	たかぎクリニック
三品 桂子	花園大学
二星 理佐	NPO法人 京都メンタルケアアクション
岡田 愛	NPO法人 京都メンタルケアアクション
内田 有彦	社会医療法人清和会 西川病院 NACT
木下 秀明	社会医療法人清和会 西川病院 NACT
山本 直紀	社会医療法人清和会 西川病院 NACT
藤田 大輔	岡山県精神保健福祉センター
西川 里美	岡山県勝英保健所
池田 耕治	財団法人正光会 宇和島病院 ACT-U
藤原 朋恵	財団法人正光会 宇和島病院 ACT-U
大山 哲	財団法人正光会 宇和島病院 ACT-U
大島 巖	日本社会事業大学
伊藤 順一郎	国立精神・神経センター精神保健研究所 社会復帰相談部
佐竹 直子	国立国際医療センター国府台病院
足立 千啓	NPO法人リカバリーサポートセンターACTIPS 訪問看護ステーションACT-J
原子 英樹	NPO法人リカバリーサポートセンターACTIPS 訪問看護ステーションACT-J
瀬戸屋雄太郎	国立精神・神経センター精神保健研究所 社会復帰相談部
吉田 光爾	国立精神・神経センター精神保健研究所 社会復帰相談部
園 環樹	国立精神・神経センター精神保健研究所 社会復帰相談部
英 一也	国立精神・神経センター精神保健研究所 社会復帰相談部
贅川 信幸	NPO法人地域精神保健福祉機構・COMHBO
香田 真希子	NPO法人地域精神保健福祉機構・COMHBO
久永 文恵	NPO法人地域精神保健福祉機構・COMHBO

2) 全国集会の開催

開催日：平成20年11月29日～30日

ACTの臨床活動に携わる者を中心に、臨床実践の質の向上を目指したワークショップや、わが国における今後のACTのあり方等について議論するシンポジウムを含めた、全国集会を実施した。

プログラム概要

小講堂	会場 1	会場 2	会場 3	会場 4	会場 5
<b>11月29日(土)</b>					
9:00	受付開始				
9:30 オープニングセッション	各チームの近況 司会 伊藤順一郎・西川里美				
10:15-12:00 シンポジウム A	シンポジウム A 「リカバリーを語る」 司会：大島巖（社会事業大学） 久永文恵（地域精神保健福祉機構・コンボ） 1. リカバリーと ACT：三品桂子（花園大学） 2. 私のリカバリー体験：増川信浩（WRAP ファシリター） その他 3. 実践上の課題：西尾雅明（東北福祉大学） 4. ディスカッション				
13:00 - 15:00 ワークショップ A	A-1 「プランニング・ここで苦勞する」 <u>足立千啓、野々上武司（ACT-J）</u> 門屋充郎（十勝障がい者支援センター）	A-2 「事例 地域との連携」 <u>藤田大輔（ACT-おかやま）</u> 事例：沢村俊彦（音更）	A-3 「ACTの質をあげるための研究法」 <u>大島巖（社会事業大学）</u>	A-4 「事例：リカバリー支援と危機介入のジレンマ」 <u>伊藤順一郎</u> 事例（ACT-U）	A-5 「京都連続企画：ACT チームを立ち上げるにはー日本で必要なこと」 <u>三品桂子（花園大学）</u>
15:30 - 17:30 ワークショップ B	B-1 「県の施策に ACT をどう根付かせるか」 <u>植田俊幸（鳥取）</u> <u>藤田大輔（岡山）</u> <u>桶田昌平（音更）</u>	B-2 「家族支援」 <u>伊藤順一郎、英一也、園環樹（国立精神・神経センター精神保健研究所）</u>	B-3 「就労支援の始め方・続け方」 <u>倉知延章（九州産業大学）</u> 、 <u>IPS-J、地域活動支援センター</u> 柿の木	B-4 「事例：退院支援」 <u>高木俊介（ACT-K）</u> 事例（NACT）	B-5 「京都連続企画：ステージ理論 - 望ましい変化を引き出すために」 <u>岡田まり（立命館大学）</u>
18:30 ~ 懇親会		司会：高木俊介（ACT-K）			
<b>11月30日(日)</b>					
9:00 - 11:00 ワークショップ C	C-1 「ACTで経営は成り立つのか・ACTを続けていくためには」 <u>内田有彦（NACT）</u> <u>原子英樹（ACT-J）</u> <u>高木俊介（ACT-K）</u> その他	C-2 「WRAP」 <u>久永文恵、らっびん、二星理佐、その他</u>	C-3 「DBT（弁証法的行動療法）：BPDとチームワーク」 <u>西尾雅明（東北福祉大学）</u> <u>山崎さおり（長谷川病院）</u>	C-4 「チームメイキング 人材育成」 <u>梁田英麿（S-ACT）</u> ACT-K、ACT-U	C-5 「京都連続企画：行動療法的訪問家族療法の基礎」 <u>佐藤純（京都ノートルダム女子大学）</u>
11:30 - 13:00 シンポジウム B	シンポジウム B 「ACT の定着のために何をしたら良いのか？」 司会：伊藤順一郎（国立精神・神経センター精神保健研究所） 梁田英麿（S-ACT） 1. 後藤雅博（新潟大学） 2. 門屋充郎（十勝障がい者支援センター） 3. 藤田健三（岡山県精神保健福祉センター） 4. 高木俊介（ACT-K） 5. 指定発言、ディスカッション（30分）				

## 2. 全国9カ所における ACT 普及啓発のための講演会・ワークショップの開催

### ACT 北海道研修会（帯広市）

委託先：北海道立緑ヶ丘病院附属音更リハビリテーションセンター

1) 開催日時：平成 21 年 2 月 28 日（土）～平成 21 年 3 月 1 日（日）

2) 開催場所：とかちプラザ（北海道帯広市）

3) 参加者数：113 名（実人数）235 名（延べ人数）

4) テーマ：

- ・ 基調講演「ACT（包括型地域生活支援プログラム）について」
- ・ ワークショップ
  - 「ACT を実践して感じたこと」
  - 「ACT のチームワークを考える」
  - 「WRAP（元気回復行動プラン）の世界に触れる」
  - 「WRAP を体験する」
  - 「就労支援を語る」
  - 「就労とリカバリーを語る」
  - 「家族とリカバリー」
  - 「クラブハウスとリカバリー」

5) 内容

【1】 基調講演：演者 西尾雅明（東北福祉大学）

ACT の普及を目指して、プログラムの構造やこれまでの訪問サービスとの違いなど、わかり易く紹介していただいた。

(ア) ACT の紹介（海外および日本での活動や位置づけ）ACT-J&S-ACT の活動について

(イ) リカバリーやストレングスモデルの理念の実践

(ウ) 今後の課題や展望について

【2】 ワークショップ

(ア) ACT：ACT の概念を実践してきた市川（千葉）、仙台、北海道からの活動を通して紹介。チームの立ち上げについても報告。チームのあり方、訪問看護との違い等についてディスカッションを行った。

(イ) WRAP：WRAP やリカバリーについて話し合い、理解を深めた上で、実際に WRAP クラスを実施し、理解を深めた。

(ウ) 就労：就労支援（IPS）の基礎知識に触れた上で、就労支援を利用したメンバーに自らの経験やリカバリーにおける就労の役割を報告してもらい、意見交換を行った。

(エ) 家族：さいたま市での施策や活動状況を紹介してもらい、家族の現状と必要な支援策、家族会の役割、勇気を持って社会に発信することの重要性を示した。

(オ) クラブハウス：クラブハウスの概念を学んだ上で、各地域の報告を実際に利用したメンバーから報告してもらい、「クラブハウス型デイケアプログラム」について検証した。

6) 成果

基調講演では、ACT の概念についてわかり易く伝えていただくことができた。その上で、実際の ACT-J における具体的な活動を紹介され、今後の課題・展望についても示され、ACT の理解と今後の実践に役立つものとなった。

「ACT を実践して感じたこと」のワークショップでは、ACT-J、S-ACT、音更リハビリテーションセンターの活動報告に加え、DVD を用いて ACT-K の実践報告も行った。わが国を代表する各地の報告

を実際に共有することができ、ACTに対する理解がより深まった。「ACTのチームワークを考える」のワークショップでは、既存の施設からチームを立ち上げた経験から報告がなされた。チームの成り立ちやチームワークとは何かについて、本質的な問題が議論された。

WRAP(元気回復行動プラン)のワークショップでは、1日目はWRAPの概要などについて学び、2日目は体験クラスを通してWRAPを肌で感じ理解を深めた。自分の専門家は自分自身であり、リカバリーには際限はないということを強く印象づけるワークショップであった。

就労ワークショップの「就労支援を語る」では、香田講師よりIPSの概論、本多講師よりIPSの事例報告をしていただき、就労支援の実際・醍醐味などを感じることができた。「就労とリカバリーを語る」では、6名の利用者に体験を話してもらい、働くことでリカバリーにつながるという体験を共有することができたと思われる。

「家族とリカバリー ～家族から家族へ 新たなつながりを求めて～」のワークショップでは、

- ・ 十勝在住で中心的家族の集まりを運営している家族の方、病院で家族会活動に携わっているPSW、デイケアスタッフ、大学の教官・学生などが参加した。議論の中で、当事者・家族・主治医との三者関係の中で家族の疎外感、家族への支援の少なさ(家族難民、神頼みも少なくない現状) 家族会例会への参加者減少傾向、家族の集まりを運営する限界、などの意見が出され、家族が明るく元気になれるよう、行政に向け声を挙げていくこと、家族にまで出向く「ACT」的支援が各地に広がっていく必要性を確認した。
- ・ 家族が今まで精神医療に閉じ込められていた情報(薬、制度など)を積極的に得ること、そして新しい家族に伝えていくことの重要性についても議論された。
- ・ 「家族の力」として上記のことを実現するため、家族の集まりとしての自立したネットワーク(RethinkやNAMIのような)の必要性が確認され、新たな遺伝子をもった家族のネットワークづくりに対する機運を高めることができた。

クラブハウスのワークショップでは、少人数であったが、アメリカマディソンの精神保健システムや日本のクラブハウスの現状等の情報提供ができた。実際に関わっている当事者のリカバリーの話を知ることができ、有意義なものとなったが、内容が盛りだくさんだったため、意見交換の時間が足りなくなった。

研修会の最後には、各ワークショップに分かれていた参加者に集ってもらい、シェアリングを行った。多くの参加者が集まり、各ワークショップの報告や、課題等の意見が活発に出されていた。特に、当事者の参加者の満足げな表情が印象的であった。

## 7) アンケート結果概要

参加者実人数113名に対し、57名がアンケートに協力してくれた。

本研修会の満足度については、基調講演で「非常に満足」と「まあまあ満足」の合計が96%、ワークショップでも計97%と、高い率になっている。

アンケートの回答者には病院や施設に勤務しているスタッフが多かったこともあり、ACTについて「簡単な内容を聞いたことがある」と答えた方が30%と多かったが、その一方で「初めて聞いた」「名前は聞いたことがあった」という回答も、計31%あった。

その中で、本研修会に参加し、「ACTに関心をもった」「まあまあ関心を持った」と96%の方が回答しており、ACT普及啓発という目的の一端は果たすことができたと考える。

また、自由記載欄である「ACTへ期待すること」「導入にあたって予想される困難」についても、たくさん意見が寄せられた。その中で、現在の診療報酬の制度でACT運営が困難との指摘が複数あり、制度化にむけて多くの課題があることを感じさせられた。

「意見・感想」では、ワークショップの時間、特に意見交換や交流の時間が欲しかったとの回答が多く、反省点のひとつである。

アンケートの回答を読むと、中から研修会への期待や意見交換の場の必要性が強く感じられ、本研修会が開催された意義を感じ取ることができた。

## ACT に学ぶ (札幌市)

委託先：札幌デイケア協議会

- 1) 開催日時：平成 21 年 3 月 7 日 (土)
- 2) 開催場所：WEST 19 (北海道札幌市)
- 3) 参加者数：113 名
- 4) テーマ：札幌デイケア協議会公開講座「ACT に学ぶ」

### 5) 内容・プログラム

- 【1】講義・講演内容： ACT の基礎知識 ACT の実践とその可能性  
【2】講師：佐竹直子 国立国際医療センター国府台病院 (精神科医師)  
足立千啓 NPO 法人リカバリーサポートセンター ACTIPS  
(ケースマネジャー)

初めに「ACT に必要な考え方」と題して、3つのキーワード (リカバリー、 ストレングス、 ケア マネジメント) を挙げ説明される。その上で、“重症の精神障害を持つ方の地域での生活について考える” 中での必要とされるサービスについて語られた。

続いて、「ACT の基礎知識」について説明が行われ、実際の関わりについて「ACT-J の実践」を通して説明いただく。事例を提示いただいたことで、より具体的なイメージを参加者が抱くことができた。

さらに、後半は「チーム精神科医からみた ACT-J の事業化と病院との連携」を語っていただき、わが国において研究事業として始まった ACT-J が事業化される過程と問題点について挙げていただき、さらに事業化された現在、医療機関側としての連携のあり方について語っていただいた。

### 6) 成果

開催の前週には、同じ北海道内(帯広)にて同じく研修会が行われていたが、案内を北海道内の医療機関、行政(保健所)に発送、同時に各専門職能団体に案内に関する協力を求めた結果、札幌近郊のみならず道内各地から多くの参加者が来場した。また、デイケアに従事するスタッフ以外に、訪問看護担当スタッフの参加もみられたが、医師の参加が無かったことが残念といえよう。(参加者状況別紙)

「入院医療中心から地域生活支援へ」と方向性が出されたわが国の精神科医療の現場において、近年の社会的なニーズや対象者の多様化により、精神科デイケアはその機能や役割期待を増している。医療の枠組みで実施されるデイケアではあるが、そこには必ず利用者の生活が存在しており、デイケアのスタッフは、医療と生活の双方の視点を持ち支援を行っている。

しかしながら、医療機関併設型のデイケアが多い日本の現状では、デイケアに専従するスタッフが配置転換等で移動となることも多く、必ずしも共通した認識の下に関わり続けることが可能とはなっていない。

今回、重度精神障害者の包括的地域生活支援を謳う ACT の理念や対象者への視点については、精神科デイケアにおける理念と共通するものが多くあると考えたが、講師 2 名が実践に携わっている中で、より実践的な ACT の状況や医療機関との連携について語っていただいたことから、参加者が自身の実践の地域、現場に引き寄せて ACT を理解するきっかけとなったと思われる。

講演の最後に行った質疑応答の時間の中で、多くの質問を参加者からいただいたことでも、参加者自身が多くの刺激をいただいたことが明らかであった。

### 7) アンケート結果概要 (回収率 53 名 / 113 名 = 47%)

参加者の満足度は、「非常に満足」と「まあまあ満足」とで 94% であり、ACT への関心については、半数が「非常に」、残り半数が「まあまあ」関心を持ったとの回答であった。約 6 割が ACT に関する詳しい知識・情報を持たない中、実践に基づく講演内容が、参加者への意識付けを促進したと思われる。

こうした意識は、アンケート後半の記述式の欄において多くの回答をいただいたことから証明できよう。

一方で、精神保健福祉の領域で実践に携わっているからこそ見える現実的な課題についても多くの指摘をいただいている。例えば、医師との連携 (医師の意識改革!?)、活動を裏付ける財源とマンパワーの確保や、従事するスタッフのモチベーションの継続と質の担保、地域格差などが挙げられている。特に北海道に

おいては、全国一のベッド数を抱える大都市・札幌の課題と、医療機関に限られる地域の差異や、広大な医療圏・生活圏の中での活動が展開されるための課題があることを、多くの方から指摘いただいた。

市川で実践されている ACT-J の活動を参考にしつつも、その地域に根ざした実践が展開されるような構造作りも必要だと、考えさせられる意見が多かった。



## ACT を学ぶ (大阪市)

委託先：財団法人 石神記念医学研究所

- 1) 開催日時：平成 21 年 3 月 10 日 (金)
- 2) 開催場所：大阪市鶴見区民センター 小ホール
- 3) 参加者数：145 名
- 4) テーマ：『ACT-K』(京都メンタルケア・アクション) が生み出したもの

### 5) 内容

【1】講演『ACT-K (京都)』が生み出したもの その活動の実際

演者：高木 俊介 氏 (たかぎクリニック院長 / ACT-K 主宰)

\* 『ACT-K』とは何か - その制度や理念について -

ACT とは、「包括型地域支援プログラム」と訳され、重い精神障害をもつ人を対象とした、多職種によるチームアプローチで、時間に関係なく生活の場でサービスが提供される。スタッフは、ほぼ 1 人に 10 人の利用者を抱え、日常生活全般にわたって医療、保健、福祉サービスを提供する。その結果、精神病院への入院期間の減少や入院率の減少、地域生活・生活の質の安定などがもたらされる。

「ACT-K」における理念では、「リカバリー」を最も重視し、サービス利用者 ACT の過程で、エンパワメントやストレングスを自ら引き出せるように努力を惜しまない。

演者：コ・メディカル (ACT-K 臨床チーム)

\* 『ACT-K』が生み出したもの

- ACT-K における実際の活動内容について DVD 等を交えての報告 -

ACT-K の臨床チームによる実践を報告。具体的な事例への支援を DVD を活用して解説した。

次に、ACT-K (京都) のシステムや利用者の現状 (利用者 101 名、うち 85.1% が統合失調症であること、地域関係機関との連携、訪問回数、スタッフへのサポート) などから、スタッフがあくまで利用者を信じて、共に歩んで行こうとすることがよく理解できる内容であった。

【2】シンポジウム『ACT-K』からの学びをどのように具現化するか？

- 人材育成や法・制度化のすすめについて -

コーディネーター：高木 俊介 氏 (たかぎクリニック院長 / ACT-K 主宰)

演者：伊藤順一郎 氏 (国立精神・神経センター精神保健研究所)

\* 『ACT-J』の実践をとおして

演者：藤田 大輔 氏 (岡山県精神保健福祉センター)

\* 『ACT おかやま』の実践をとおして

演者：大野 素子 氏 (大阪府精神障害者家族会連合会 会長)

\* 家族の立場から - 精神障害者を抱える家族が必要としている生活支援 -

演者：武南千賀子 氏 (社会福祉法人野のちから 理事長)

\* 地域支援の立場から - 地域でくらす -

国が 6 年前に行ったモデル事業としての「ACT-J」や、公的機関での「ACT おかやま」の特徴ある実践が報告された。先に報告された「ACT-K」を含む 3 つの ACT は、現在我が国の代表的なもので、一堂に会したことは意義深いものである。

それに対して家族の立場からは、障がいをもっていても自立した生活を保障する住宅や日常支援体勢の確立を、地域支援者の立場からは自立支援法の下で苦しい経営難に陥っていることや、それでも地域住民の中へ溶け込みながら、社会復帰施設の利用者を支援していることなどが報告された。

### 6) 成果

ACT は我が国では、未だコンセンサスを得ることができていない。実践に対して公的支援がない中で、大変な困難を切り抜けながら一部の実践者の手によって、今回の参加者にとっては、おぼろげながらその形

が想像されたことだろう。

多くの医療、保健、福祉の関係者に、「現実性がない」と一蹴されてきた実践は、京都や市川、そして岡山で着々と進展していることを知ることができた。しかしそれはまだ、余りにも小さいため、家族や地域支援者のニーズからは程遠いかもしれない。それでもこのような啓発事業に参加し、共に実践を考えようとする多くの人々がいることを知ることができたことは収穫だった。

## 7) アンケートの結果概要

今回の講座により ACT について、理解が深まったとした参加者が大半であり、満足度は高かった。

特に、高木氏及び伊藤氏、藤田氏の専門家からのご報告と同時に、当事者の身近な援助者である、家族及び地域支援の立場として、大野氏、武南氏にもご報告いただき、本音が聞けたことに満足している参加者も多かった。

脱施設化や地域生活支援について、どのようなネットワークを構築しないといけないのか、更にそのネットワークの中で参加者自身がどのような役割を担わないといけないのかを、改めて考える良い機会となったことが、講演会後に回収したアンケートから読み取ることができた。

「講座・シンポジウムの内容について」

- ・ 訪問看護をしていて、退職後機会がありヘルパーステーションを立ち上げたところです。今までは精神科にはあまり縁がなかったのですが、お役にたきたいと思っています。(看護師)
- ・ (全く知らなかった) 出来ることはしたい。高木先生以下スタッフの頑張りに尊敬。(内科医 - ホスピス医療 77 歳)
- ・ 各 ACT に特徴があり、もし自分が参加するならどのようなものがよいか、興味を引かれました。(PSW)
- ・ 大野さんの突っ込みはとても興味深かった。一般的な地域精神医療の現実を ACT をされている方々に、もう少し理解していただければと思ったのですが、考え過ぎでしょうか。先生方少しお疲れですね。(医師)
- ・ わたしは、正に世間で「地域へ」と言われているからなんとなくそうしないといけないと感じている者の一人です。今日 ACT の理念やなぜ必要なのかを聞くことができ、もっと理解を深めたいと思いました。(作業療法士)
- ・ ACT の限界と役割分担について講師は述べていますが、もう少し明確にすべきではないでしょうか。(医師)
- ・ 最近ビハーラ運動の一環として民間のシェアハウスなるものに関わって、精神障害者の入居者も多く、その中で考えさせられ、連帯したいと考えている。ACT の存在は全く知らなかったのですが、学生時代に京都で精神病院の問題にかかわり、その頃のひどさとあまり変わっていないことにショックを受けました。(中略) 自己の問題としてどう連帯すべきか考えさせられ、非常によかったです。ありがとうございました。(僧侶)
- ・ 具体性に富んでおり、参考になった。実践されているところは、これから試みようとする Follower に向けて、見学、公開の機会をたくさん設けてほしい。(作業療法士)
- ・ 退促の支援員です。入院中から地域の既存の資源を丁寧に組み立てていくことが退促かなと思って行っています。(退促支援員)
- ・ 社会貢献支援員として働いていて、何か地域福祉に足りないかは C に寄り添える職業人が圧倒的に少ない、アウトリーチが本当に必要です。(自立支援員)
- ・ 研修会や各メディアから、これからさらに多くの情報発信をしていただきたいです。改革ビジョンの流れから、我々医療従事者の地域資源のリーダーとなっていただきたいです。(看護師)
- ・ DVD を見て、利用者の方が、最初全く心を開かなく、妄想の世界に引きこもっていたが、関わりを重ねることで徐々に現実の世界を受け入れられるようになり、地域に根付いていけるようになったのを見て感動しました。(看護師)
- ・ ACT の中で服薬管理について、どのようにされているか知りたかったです。(看護師)
- ・ ACT-O (大阪) を目指します。(学生)
- ・ 地域で支援する者として、病気や障害をもちながら生活される本人や家族、一番よい支援を考える時、地域の中での医療の必要の大切さを感じる。(福祉施設職員)
- ・ 初めての参加、とてもよかったです。また、次回があれば参加したいです。(行政)
- ・ 本音のトークは説得力がありました。24 時間体制の支援が必要だと実感しています。(自立支援員)

- ・ 定期的に今日のようなシンポをやってほしい。(家族)
- ・ 高木先生の5年間の実践を見聞して、効果があると思えた。いろいろな立場、家族、地域支援者の話も聞けてよかった。やはり家族会の方が一番大変だと感じた。(学校関係者)
- ・ 午前中の上映で、会場のあちこちで涙される方がたくさんおられるのを感じました。家族を支援していくことが、本当に必要とされていると思いました。(学生)
- ・ 今まで重度の障害をもった方の退院は難しいと思ったが、ACT の話を聞き可能であることが分かった。(作業療法士)
- ・ 医療と福祉、地域がもっと近づければ、利用者さんの主治医とは連絡を取れないことが多いなかで。(福祉施設職員)
- ・ 現在自分の所属している医療機関では、この実践は到底不可能と思われるが、世の中の現状、精神保健福祉を取り巻く潮流を視野にいれると、現場スタッフとしてACT の実践にかかわっていかざるを得ないと感じられる。多くの医療スタッフがACT の実践に共感しつつ実際の参加となるとたじろいでしまっているのが現状だと思います。このたじろぎを希望や自信に変えて下さるような講座をもっと開いてくださればと感じています。(PSW)

## ACT が地域精神医療を変えられるか(富山市)

委託先：富山市民 ACT 研究会

- 1) 開催日時：平成 21 年 3 月 15 日(日)
- 2) 開催場所：富山国際会議場(富山県富山市)
- 3) 参加者数：108 名
- 4) テーマ：「ACT が地域精神医療を変えられるか」
- 5) 内容
  - ・活動実践報告 「ACT-G のとりくみについて」  
宮部真弥子(谷野呉山病院)  
「総合病院における ACT 導入の効果」  
川端 勉(富山市民病院)
  - ・視察報告 「地域精神医療の旗手 ~オーストラリアの視察報告~」  
吉本博昭(富山市民病院)
  - ・講演 「ACT を ACT たらしめるものとは？」  
~国府台・仙台で得た ACT の臨床観~」  
西尾雅明(東北福祉大学)

### 6) 成果

講演会当日は、医療・福祉・保健関係者などの専門家の参加のみならず、行政の参加や、精神障がいをもつ当事者と多数の家族の参加を認めた。

「包括型地域生活支援プログラム(ACT)」についてはほとんど知らない方々は、講演をとおしてその概念と当事者の「リカバリー」を目指す支援のあり方を知る機会となった。

富山市民病院や谷野呉山病院での実践活動の報告は、「包括型地域生活支援プログラム(ACT)」については、まだまだ導入は遠いと感じていた方々にとって、より身近なものと感じ、それぞれの組織体系に従ったプログラムや実践報告を通して地域で暮らしたいという当事者のニーズにかなう取り組みであることが参加者に伝わったものと思われる。

一方、オーストラリアの地域精神医療の視察報告より、日本とオーストラリアの国民の一人当たり GNI(国民総所得)や精神保健予算もほぼ変わりがないにもかかわらず、コミュニティ精神医療の展開に大きな開きがあり、日本の脱施設化政策の遅れの指摘とともに、日本にマッチした日本型の脱施設化への推進の必要性が論じられ、共通の認識の方向性が感じ取られた。

この講演会は当事者や家族の参加もあり、当事者のサイドにたったコミュニティ精神医療の構築が ACT を通して参加者に拡がる機会を提供した。

### 7) アンケートの結果概要

参加者 108 名の内、アンケートに答えていただいた方は 75 名で、回収率は 69.4%であった。その内訳は、非常に満足 32.0%、まあまあ満足 62.7%、やや不満 2.7%、不満 0%、未記入 2.7%で、満足度は 94.7%と高かった。

ACT に関する知識についての設問では、初めて聞いた 17.3%、名前は聞いたことがある 14.7%、簡単な内容を聞いたことがある 24.0%、本や学術雑誌で読んだことがある 18.7%、研修を受けたことがある、21.3%、実践している病院で勤務している 4%であった。このことは、ACT について実践や研修を受けて知識が豊富なものは 25.3%で残りの参加者の 3/4 は ACT を知らないか知っていても本や雑誌で知ったに過ぎないことになる。この結果は ACT への関心度がどの程度あるかをチェックした設問に端的に表れている。非常に関心が 58.7%、まあまあ関心 37.3%、あまり関心を持たない 1.3%、ほとんど関心をもたない 0%、未記入 2.7%で、関心を持つ割合は 96.0%で ACT の概念や実態などを知らうという動機を持って参加して方であり、その参加満足度も高いという結果であった。

さらに、所属は多岐にわたり、多い順に並べると病院・クリニックスタッフ 50.7%、家族 21.3%、行政 8%、社会復帰施設 5.3%、当事者 2.7%、その他であった。家族会が共催していたこともあり家

族の参加が多いという特徴があるが、行政が関心を持っていることも明らかになった。また、職種別には PSW、看護師、OT、医師、保健師という順であり ACT に今後関わる可能性のある職種が多かった。

これらの結果を総合すると、ACT を知らないか知っていてもその知識が少ない方が、大きな ACT への関心を持って参加し、今回の講演会を通して、ACT の実践報告、オーストラリアの地域精神医療の実態、さらにその概念や支援技術を聞くことにより大いなる満足度を得たという結果であった。その意味では、テーマ「ACT が地域精神医療を変えられるか」に関して関心を持っていただき、脱施設化や地域生活支援のあり方、ならびに当事者の「リカバリー」を目指した支援のあり方について関心を持ち、富山の地に ACT を目指す方々のきっかけ作りをしたものと、アンケートから読み取ることができた。

## 精神障害者の地域生活を支える ACT ( 島根県 )

委託先：社会医療法人清和会 西川病院 NACT

- 1) 開催日時：平成 21 年 3 月 15 日 ( 日 )
- 2) 開催場所：いわみ～る ( 島根県浜田市 )
- 3) 参加者数：95 名
- 4) テーマ：「精神障害者の地域生活を支える ACT」
- 5) 内容

### 【1】佐竹 直子 ( ACT-J : 精神科医師 )

テーマ：ACT の概念や基本的な構造について  
地域性にあわせて ACT の必要な考え方やベースの部分において初級者に分かりやすい講演であり、ACT に限らず日々の臨床の場などに役立つ内容となった。

### 【2】中四国で行なわれている ACT の現状報告

池田 奈央 ( ACT おかやま : 作業療法士 )  
三曳 正志 ( ACT-U : 看護師 )  
藤川 太球磨 ( NACT : 精神保健福祉士 )  
中四国における ACT には様々な運営形態があり、それぞれの特徴や特色を活かしたプログラム・関わりなど事例をおりまぜながらの報告を行なった。

### 6) 成果

島根県において ACT の研修会が開催され、参加者も 95 人となり、この地域の研修会では大盛況となった。コメディカルのみならず、地域の保健師や地域活動支援センター、家族など幅広く参加しており、ACT についての「普及啓発」という面ではかなりのインパクトとなったように感じる。

講演会の内容においても、対象者との関わりにおける視点 ( リカバリー、ストレングス、ケアマネジメントなど ) では、参加者それぞれの今後の活動において、方向性を示すものであり満足度は高かったようである。

また、午後からの中四国で行なわれている ACT の実践報告においては、それぞれの運営形態が、行政・訪問看護ステーション・精神科病院と様々であり、その中での特徴や特色を活かしたプログラムや関わりといった面での報告となり、幅広い参加者のニーズに上手くあっていたものと考えられる。

研修を開催するにあたり、中四国ブロックで協力して行なうことによって、他の ACT チームとの繋がりの強化にもなり、今後も益々協力し合っていくことで ACT の普及啓発に向けて活動を行うことができるのである。そのため、このような機会が継続されていくことを願う。

### 7) アンケートの結果概要

講演会での満足度については、「非常に満足」「まあまあ満足」という答えが、ほぼ 100% であり、また関心の程度についても同様に「非常に関心を持った」「まあまあ関心を持った」という答えがほぼ 100% であった。

そのことから、今回の研修会においての参加者のニーズに上手く合わせることができたと感じる。

「日本で ACT の導入にあたっての困難な点」などの記述の中では、“ ACT の考え方は素晴らしく今後の関わりの中での参考になった ” という声はたくさんある反面、“ しっかりと制度化されないと、今の現状で ACT を行なうことは困難である ” “ 診療報酬などが確立しないと、運営は困難である ” とする意見も多かった。

しかしながら、研修会全体を通して “ 今後の利用者に関わっていく上で非常に参考になった ” “ ACT の考えを他のサービスの中でも利用していきたい ” との意見も多く、ACT の中で大切な考えが、地域の中で多少でも広がっていくのではないかと期待している。

## 東海地区 ACT 研修会（名古屋市）

委託先：精神科訪問支援研究会

- 1) 開催日時：平成 21 年 3 月 20 日（金）
- 2) 開催場所：日本福祉大学鶴舞校舎（愛知県名古屋市）
- 3) 参加者数：140 名
- 4) テーマ：「東海地区 ACT 研修会～東海地区における ACT 普及のきっかけ～」

### 5) 内容

#### 【1】講演

演者：野中 猛（日本福祉大学）

「リカバリーに向けての応援」

- ・精神障害のリハビリテーションの概論および、リカバリーに必要な概念。

演者：伊藤 順一郎（国立精神・神経センター精神保健研究所）

「日本の ACT のこれからについて」

- ・ACT についての概論および、日本でのいくつかの ACT モデルの報告。

演者：香田 真希子（特定非営利活動法人地域精神保健福祉機構・コンボ）

「ACT と IPS とリカバリー」

- ・リカバリーという考え方、IPS とは？について。
- ・ACT と IPS 実践から学んだことの報告。

演者：久永 文恵（特定非営利活動法人地域精神保健福祉機構・コンボ）

「マディソンの精神保健システムや精神障がいをもつ人に対する支援」

- ・マディソンの精神保健システムについて。マディソンモデルにおけるケースマネジメント、PACT の経験について報告。

#### 【2】ディスカッション

座長：香月 富士日（名古屋市立大学）

「全体を通してのディスカッション（質疑・応答）」

### 6) 成果

東海地区において初めてとなる ACT 研修の開催となった。当初の参加申し込みが定員をはるかに超え、東海地区において医療関係者・福祉関係者の「包括型地域生活支援プログラム（ACT）・個別職業紹介とサポートモデル（IPS）・マディソンの精神保健システム」などに対して関心の高さが伺えた。

当日は、医師、看護師、精神保健福祉士、作業療法士、行政関係者など地域精神保健福祉に関わる多職種が参加し、ACT・IPS の各プログラムの概要を伝えていく中でそれぞれの基礎となる考え方である「リカバリー」についても理解を深めることができた。また、各講師が繰り返し「リカバリー」について伝え、全体でシェアする中で、支援の方向性の確認、これまでの医学モデルから生物・心理・社会モデルを目指し、日本型の脱施設化対策を推し進めるといった共通理解が全体でされた。

さらに、東海地区において ACT・IPS プログラムを導入していくためにはどのようなことが必要か議論・意見交換が行われ、来年度以降の講演会の開催の期待も高まっていた。

### 7) アンケートの結果概要

参加者の満足度は非常に満足・まあまあ満足が 100% であり、満足度はとても高かった。

ほとんどの参加者が本や学術雑誌で読んだことがあったり、研修を受けたことがあったり、簡単な内容を聞いたことがあると答えており、ACT プログラムへの認識度の高さ、関心度の高さが分かった。また、自由記載のところには今後も講演会や研修会の開催を要望するという意見が多くあったことから関心の高さがうかがえる。さらに、ACT が日本（東海地区）で広がっていくことで脱施設化へつながっていくという期待も多かった。

ただ、実際に ACT プログラムをおこなうにあたって具体的な運用方法（人員確保、費用、設備など）のイメージがまだ湧かないという意見も寄せられていた。

今回の研修は脱施設化や地域生活支援の在り方、ならびに当事者の「リカバリー」を目指した支援の在り方について考えるきっかけには間違いなくなったと言える。それが、参加者である臨床スタッフの意識改革につながり、今後の ACT への関心の高さや継続的に講演会・研修会を行ってほしいという要望につながったと言える。



## リカバリーについて学ぼう！～リカバリーを目指す ACT/IPS とは～（新潟市）

委託先：恵生会 南浜病院

- 1) 開催日時：平成 21 年 3 月 21 日（土）
- 2) 開催場所：新潟市総合福祉会館（新潟県新潟市）
- 3) 参加者数：106 名
- 4) テーマ：「リカバリーについて学ぼう！～リカバリーを目指す ACT/IPS とは～」

5) 内容：

- 【1】 講師：久永文恵（NPO 法人地域精神保健福祉機構 ACT-IPS センター）  
増川信浩（WRAP ファシリテーター）

「リカバリー概念と WRAP（元気回復行動プラン）の紹介」と題し、ACT/IPS を実践するには不可欠な概念であるリカバリーについてわかりやすく説明した。また、WRAP を紹介し、リカバリー概念と WRAP の実際について参加者と体験を共有した。

- 【2】 講師：香田真希子（NPO 法人地域精神保健福祉機構 ACT-IPS センター）

「ACT/IPS の基礎知識と具体例」と題し、ACT/IPS の基礎知識を説明し、DVD を用いて実際の様子をわかりやすく伝えた。また、講師の IPS 体験報告を行った。

座長：後藤雅博（新潟大学）

上記二題について司会進行をし、質疑応答により参加者の理解を促した。

6) 成果

研修会には、医療関係者、福祉関係者などの専門家のみならず、精神障がいをもつ当事者やその家族、精神保健福祉のボランティア、学生、一般市民などが参加した。

今回は、ACT/IPS という専門知識を学ぶ前段階として、根底にあるリカバリー概念について学ぶことで参加者の意識の転換を図った。また、WRAP を紹介し、実際に WRAP の理念や方法に触れることで、リカバリーについてわかりやすく伝えることができた。

その結果、当事者の“らしさ”“希望”や“ストレングス”に目を向けること、視点を変えることの大切さに気づいたという意見や、改めて確認できたという感想が挙げられ、主催者の意図は概ね伝わったと思われる。

また、研修会の構成としてリカバリー概念について最初に触れたため、何のために ACT や IPS を行うのかということが参加者に伝わりやすかったようだ。ACT/IPS については DVD で実際の様子を見ることができ、かつ講師の実体験を聞くことによって、具体的な支援のあり方を参加者にわかりやすく伝えることができた。

さらに、新潟県内では ACT を行っているところがないということが明らかとなり、参加者からは新潟でもぜひ始めてほしいという意見や、今後もこのような研修会を継続してほしいという希望が挙げられ、ACT/IPS 普及の兆しがうかがえた。

7) アンケートの結果概要

アンケートの回収率は 70%であった。

研修会の満足度は、「非常に満足」が 59%、「まあまあ満足」が 39%であり、合わせて 98%と、満足度は非常に高かった。

ACT についての事前知識は、「初めて聞いた」が 27%、「研修を受けたことがある」が 23%、その中間層が 50%であった。

ACT についての関心度は、「非常に関心を持った」が 54%、「まあまあ関心を持った」が 44%であり、合わせて 98%と、非常に高い関心度を示した。

以上のアンケート結果から、今まで ACT について知っていた人だけでなく、初めて聞いた参加者にも満

足してもらえらる内容であつたといえる。また、この研修会が参加者のリカバリーに対する意識の向上と、ACT/IPS 普及啓発に寄与したことが示唆される。

## 北九州 ACT 普及啓発セミナー（北九州市）

委託先：北九州 ACT 普及啓発セミナー実行委員会

- 1) 開催日時：平成 21 年 3 月 22 日（日）
- 2) 開催場所：北九州市総合保健福祉センター 2F
- 3) 参加者数：100 名
- 4) テーマ：「北九州 ACT 普及啓発セミナー」
- 5) 内容
  - 講演 「あらためて ACT の概要と理念を理解する」  
瀬戸屋雄太郎（国立精神・神経センター精神保健研究所）
  - 講演 「ACT の現場最前線」  
池田耕治（財団法人正光会 ACT-U）
  - 講演 「ACT の運営を成功させるには」  
高木俊介（ACT-K / たかぎクリニック）
  - 全体セッション  
進行：倉知延章（九州産業大学）  
三井敏子（北九州市立精神保健福祉センター）

### 6) 成果

当日は、医療関係者・福祉関係者などの専門家のみならず、精神障がいをもつ当事者の方やその家族、精神保健福祉を勉強中の学生などが参加した。近年精神保健福祉の分野において注目されている「包括型地域生活支援プログラム（ACT）」について、理念と実際と運営という 3 つの講演を行なったことにより、ACT の全体像が理解できたといえよう。また、最後に全体セッションを持ったことで、より具体的な項目を深めることができた。

北九州をはじめ、九州では ACT はまだ取り組まれていない。このセミナーによって、ACT の開始および実践方法について具体的なイメージがもてたといえる。病院に勤務する専門職にとっては自己否定につながる意識が芽生えたかもしれない。しかし、そのことで、支援の仕組みそのものをパラダイム転換させていくことにつながることを期待したい。

### 7) アンケートの結果概要

経験の浅い専門職、家族や精神障がい者本人にとっては「新鮮」で、「希望がもてる」、「早く実現してほしい」という内容が多かった。しかし、経験の深い専門職にとっては、自己のアイデンティティを大きく揺さぶられたようで、まだ十分に受け止め切れていないように感じられた。

## 精神障害者の地域生活と社会参加を実現する支援の仕方（品川区）

委託先：IPS-T

- 1) 開催日時：平成 21 年 3 月 28 日（土）
- 2) 開催場所：品川イーストワンタワー（東京都品川区）
- 3) 参加者数：50 名
- 4) テーマ：「精神障害者の地域生活と社会参加を実現する支援の仕方」

### 5) 内容

演者：伊藤順一郎（国立精神・神経センター精神保健研究所）

中原さとみ(桜ヶ丘記念病院)、飯野雄治(稲城市障害福祉課)

渥美正明(足立リカバリーサバイバー)、岡本さやか(WRAP ファシリテーター)

演題：

日本の ACT のこれからについて、リカバリー体験者、IPS 支援利用者より、IPS 概論、動機づけ面接法のエッセンス、やりたいことと長所の引き出し方、目標と計画シート、私らしさの保ち方、IPS の職場開拓、医療と統合された支援

現在の日本の精神保健福祉の主たる舞台を病院や施設から地域での生活へと転換する必要性を伝えたいと、それを実現する ACT について紹介した。さらに ACT の就労支援部分とも言える IPS について IPS-Tokyo から紹介し、そこで展開される具体的なアイデアをワークショップ方式で伝えた。明日からでも精神障害者の一般就労などの社会参加と地域生活を実現すべく支援できる発想とモチベーションを持った支援者を養成することにより、結果として ACT のようにストレングス・リカバリー志向の支援が普及する土台を作ろうとするものである。

その一方、研修全体にて IPS の手法を盛り込んだ企画とした。つまり当事者の長所を最大限に活用し、当事者とともに作り上げたテキスト編集・スタッフ配置。実際に手を動かしながら考えるワークショップスタイル。無事研修を終えたことをツールにより祝い、やる気の継続を図る方法。研修の受講動機を明確に文字にしてアセスメントとすると同時に、目標を自ら立てる機会を提供し、支援の第一歩を例示することにより実現可能なことをイメージしやすくしモチベーションを高める研修スタイル。当事者の気持ち・意見を尊重し、確認しながら先に進むスタイル。これらを体感することで IPS の要素・発想を言語外の方法で伝えることを試みるものである。

### 6) 成果

「やりたいことと長所の引き出し方」では、実際に自らのリカバリー体験を語った当事者の長所を書き出してみた。また長所を手がかりにセールスポイントなどを整理し、企業の人事担当にご本人を紹介し職場開拓するロールプレイを行うことにより、本人の長所を端的に伝えることの技術と大切さが伝わったようであった。「目標と計画シート」にて具体的なケアプラン様式を紹介し、実際に受講生の目標と計画を記入してもらった。長期目標などそのためにやることを記入し、見通しを立てる意義について体感し納得できたとの感想が聞かれた。「IPS の職場開拓」では、折り紙作品を作るのが得意な方が活躍できる方法を考えるワークショップを行い、ご本人と社会との接点を探るために必要なアイデアや技術について感じる機会を提供した。本人の長所をきっかけに社会との接点を見出していくことが就労支援の原点であることが伝わったようであった。その他、職場開拓のアイデアとしていくつか具体的に示した。

IPS に関するこのような研修が日本の事例やアイデアを伴って開催されることは恐らく初めてである。ACT が目指す地域生活中心の精神保健医療福祉という大きな目標に向かうために必要な具体的な一歩として、IPS の中からいくつかの具体的なアイデアやイメージを提供したわけだが、実際に明日から取り組みそうなアイデアが得られたという感想をいただいた。

### 7) アンケートの結果概要

ACT について参加者の約70%が「非常に興味を持った」、約30%が「まあまあ興味を持った」とのことであり、ACTの普及啓発事業としては成功したと考えられる。IPSについて「当事者の声・意見・報告が、参考になった・エネルギーになった」「本でしか知らなかった知識が具体的に見え、明日から使える知識が得られた」等の感想があり、主催者の期待に沿うものである。一方「IPSの基本的な話を聞きたかった」「概論的な話ではなく、もっと実践的な話が聞きたかった」との意見もあり、参加者の幅の広さを反映したものとなった。

すでにACTやIPSについて実践あるいは熟知している方にとってはやや不満が残る内容だったことは否めないが、対決的な技法により新しい支援方法押し付けるのではなく、限られた時間の中で日本の精神保健福祉の現場に必要な具体的なアイデアを提供し、支援者自らがリカバリーやストレスを意識する支援へと方向転換しだす背中をそっと促すことについて、主催者として満足のゆく結果が得られたと考えている。

### 3. 全国3カ所の事業体を対象に、ACT立ち上げ支援を、研修、フィデリティモニタリング、コ

#### ンサルテーションを通して実施する

全国3カ所の事業体を対象に、ACT立ち上げ支援のための情報提供・研修・コンサルテーション等を開始した。各地の実情に即した支援を提供し、進捗状況に関してもモニタリングを行った。

## ．事業の成果

### 1． 包括型地域生活支援プログラム（ACT）の全国ネットワークづくりを行った。

また、全国集会を東京で開催した。

ACTコアグループミーティング（ネットワーク会議）では、今後のACT普及の方向性やACTサービスの質の向上に関して議論した。ACTを実践している各事業体の運営等の課題や、わが国におけるACTのあり方の更なる議論の必要性が浮き彫りとなり、ひとつのモデルプログラムを提示するまでには至らなかった。

しかしながら、各地の実施状況も踏まえ、わが国の精神保健医療福祉システムにおいて実施可能なACTのモデルプログラムを、今後提示するという共通理解を得ることができた。

また、このネットワークが、今後のACTの質の向上やACT立ち上げ支援のリーダーシップを担うという方向で同意を得ることができた。

全国集会では、日々の臨床実践の質の向上を目指すワークショップや、今後のわが国におけるACTのあり方や方向性について議論するシンポジウムを開催した。参加者に関しては、全国でACTを実践している支援者のみならず、精神保健医療福祉分野の関係者、当事者等へも対象を拡大した。

我が国におけるACTのモデルプログラムのあり方や、ACTサービスの品質管理の面等における課題が浮き彫りとなり、今後のACTを全国普及していく上での方策について、具体的な意見交換をする場となった。

### 2．全国9カ所でのACT普及啓発のための講演会・ワークショップを開催した

全国各地の支援機関の協力を得ながら、全国9カ所においてACT普及啓発のための講演会や、臨床現場のサービスの質の向上にも寄与できるワークショップを開催した。

各地域の精神保健医療福祉の現状に基づいて、講演会やワークショップの企画がなされ、ACTの実践や理念を学ぶとともに、地域に根差した地域精神保健医療福祉のあり方について考える場となった。

また、各地のアンケート結果から、ACTに対する期待が高いことが示唆された。

例として、

- ・ 「回転ドア」現象を未然に防ぐことができる
- ・ ニューロングステイ（新たな長期入院患者）を出さない
- ・ 地域での「当たり前の生活」が実現される
- ・ 長期入院者も地域で生活できるようになる
- ・ もっと多くの人々が、ACTを利用できるようになるといい、

などが挙げられた。

さらに今後の課題として、

- ・ ACT単体の導入ということだけでなく、地域精神保健医療福祉システムの体制の再編を考える必要がある
- ・ 就労支援など、現状では診療報酬が取れない支援についての障壁
- ・ 既存の地域生活支援（例：訪問看護など）とのすみ分けをどうするのか
- ・ ACTの終了基準のあり方について議論する必要がある

などの意見が出された。

### 3．全国3カ所の事業体を対象に、ACT立ち上げ支援を、研修、フィデリティモニタリング、

コンサルテーションを通して実施した

全国3カ所の事業体を対象に、ACT立ち上げ支援のための情報提供・研修・コンサルテーション等を開始した。課題として、以下の事柄が挙げられた。

- ・ 継続的な質的なモニタリングの必要性
- ・ Webなどを活用した情報発信
- ・ ACTの管理・運営に関する経営セミナー開催の必要性
- ・ 立ち上げ支援を実施する主体の財源の確保
- ・ ACTだけでなく、各地域における精神保健医療福祉に関するシステムの構築

## ．今後の課題・展望

本事業から示唆された、ACT普及・実現に関する今後の課題と展望については、以下の3つのポイントが挙げられる。

### 1．ACTプログラムの質の維持と普及を、どのように同時に進めていくべきか

ACTを普及していくと同時に、ACTの基盤となる理念やプログラムのあり方について、質的なモニタリングが重要となる。

そのためには、わが国にふさわしいACT標準版の提示、フィデリティ尺度の開発が不可欠となる。これらについては、本事業で構築されたACTネットワークがリーダーシップを取り、実施可能なモデルプログラムを提示していく予定である。また、これは随時見直され、それ自体が利用者のリカバリーによりいっそう貢献できるものになるよう、成長する必要がある。

しかしながら、このフィデリティモニタリングは、定期的かつ継続的に実施することが重要となる。そのためには、モニタリングに伴う旅費等の財政的基盤も課題となる。

さらに、我が国におけるフィデリティを満たしたACTチームとしての認証のシステム構築も今後の課題となろう。

### 2．財政基盤

すでに実施されているACTプログラムは、クリニックと訪問看護ステーションを組み合わせるなど、いくつかの形態がとられているが、今後ACTを普及していくためには、制度化をはじめ、確固たる財政基盤が必要であることは言うまでもない。

例えば、訪問看護ステーションでの精神保健福祉士の配置基準により、より円滑なチーム運営に貢献するシステム構築は不可欠であろう。また、現時点では 就労支援や、入院者への訪問など、無償とならざるを得ないサービスにも、なんらかのインセンティブをつけていくことが、ACTの質の向上や普及に不可欠となろう。

### 3．ACTに関する教育や研修システムのあり方について

ACTの実現に必要な、「その人のありかたを中心に据えた支援」(person-centered service)、「その人の長所、能力を伸ばそうとする支援」(strength model)、リカバリー (Recovery) の概念の理解、多職種チーム(transdisciplinary team)による臨床実践、ケアマネジメントにより行われる包括的な支援などが確実に行われるように、すでにACTを立ち上げている組織への教育・研修を、今後も継続的に提供していく必要がある。このACTを実践するスタッフに対する継続研修は、プログラムの品質を保つために不可欠である。

また、ACTを立ち上げようとしている事業体には、質の高いACTの実施のための人材育成やシステム作りに関する積極的支援をしていく必要もある。

さらに、ACT以外にも、その人のありかたを中心に据えた (person-centered)、多職種チームによるアウトリーチサービスが普及し、地域生活中心の(community-based)精神保健医療福祉システムが各地で展開されるよう、その活動の主体となる人材や事業体の育成に努めることも必要であろう。これらは、本事業で実施したワークショップの内容等のノウハウも活用することができるであろう。

厚生労働省 平成 20 年度障害者保健福祉推進事業  
「包括型地域生活支援プログラム（ACT）の普及啓発・立ち上げ支援事業」  
事業報告書

発行日：平成 21 年 6 月

発行者：特定非営利活動法人 地域精神保健福祉機構・COMHBO

〒272-0031 千葉県市川市平田 3 5 1

Tel：047-320-3873

Fax：047-320-3871

この報告書・資料の無断複製・転載を禁じます。